

7 登 頂 記

(1) Mt. SENRI (仮称)

宮 本 義 海

7月2日 晴 8時30分全員でアタックキャンプの建設に出発。稜線上はナイフリッジとなり通過不可能。6月28日、7月1日にルート工作しておいたTrident Gl。側の雪壁を80m、スタカットで通過し、20m下つてTrident Gl。の源頭におりる。フィックスザイルを終了すると傾斜はおち、10232 ft. ピークも基部をトラバースしていく。単調なラツセルが続く。14時、Mt. SENRI の基部着、ツェルトを一張してアタックキャンプとする。宮本、苗村の2名が残り、他の3名は前進キャンプに戻る。

7月3日 ガス 昨日の晴天が嘘のよう、ガス濃く視界悪い。停滞。10時15分、前進キャンプから中野、安沢の2名が食糧補給に到着。

7月4日 雪のち曇 4時30分起床するも天気は回復していない。停滞。今日は米国独立記念日。

7月5日 雪のち 晴 今日も朝から雪であったが、10時過から青空となり、あわてテントを飛びだす10時50分。時間的には苦しかったが、白夜だけに気は楽である。しかし12時すぎには再びガスに巻かれてしまい、凡も強くなつてきたのでやむなくA.C.に引き返す。13時すぎ、A.C.に到着したところから、皮肉にもガスは晴れ、久々の晴天となる。完全に天気の読みを誤つてしまつた。前進キャンプからのサポート隊をむかえにいつたついでに、全員で10232 ft. ピークを登頂し、16時50分A.C.帰着。

7月6日 晴 遂に晴天に明ける。5時30分朝食、6時50分アタックキャンプ出発。昨日のトレースはほとんど消えており、新雪が重たい。10時10分、たたひたすらに直上し続け、やつとⅡ峰とⅢ峰のコルに出る。コルからはラツセルも少なくなり、忠実に稜線上をいく。南面はスッパリと切れてお

ち、雪庇が張り出している。Ⅱ峰の直下で、尾根が横に切れ、クレバスが開き、その先は20m程の氷壁になつてゐる。補助ザイルとメインザイルのダブルで苗村が取り付くが、クレバスを越えることが出来ない。南側のキノコ雪に乗つて、だましだましクレバスを越え、左上に巻き気味で氷壁を登る。その場に補助ザイルをフィックスし2人共通過し終つたとき、ガスにまかれ、視界が無くなる。前進キャンプと交信すると、30分もすればガスは切れるとのことであり、昼食とする。12時20分。予想通り、ガスはまもなく晴れ、再び歩きだす。Ⅱ峰までは単調な登り下りだけ、14時25分Ⅱ峰着。はじめⅠ峰を見る。Ⅰ峰は、南面にヒマラヤ壁をつけ、Ⅱ峰とのコルから一気にスノーリッジが続いている。コルまではラツセルのみの単調な下りであつたが、それからのスノーリッジは、両面きれおちており、不安定な新雪を一步一步踏みかためながら進む。頂上は長い台地状となつておらず、一轍奥が少々高くなつておらず、14時25分、Ⅰ峰着。トランシーバーで前進キャンプと登頂成功を喜びあり。写真撮影の後、行動食を口にして15時、下山にかかる。Susitna氷河 Trident氷河が南北に拡がり、ベースキャンプから見上げていたHayes峰も、今は肩をならべている。15時45分Ⅱ峰、17時20分、Ⅱ、Ⅲ峰のコル着。コルより空荷でⅢ峰にむかい、本日3つめのピークを踏んで17時40分コルに戻る。そろそろ疲れがでだしたので、大休止とし、軽い夕食をとる。18時、最後の下りにかかり、A.Cまで2ピッチで下る。19時25分、A.C帰着。20時45分夕食。

7月7日 晴 6時30分朝食、A.Cを撤収して8時前進キャンプにむかう。途中、サポート隊と出会い、10時、前進キャンプに集結。今日はセタ。

(2) トライデント・ピーク登頂 (1971年7月7日) 安沢 寛
トライデント・ピークとは我々がAd.cを建設したコルのすぐ北東にある約10300ft.のピークである。我々はこのピークがMt.ヘイズとともにトライデント氷河の源頭にあたるためこれをトライデントピークと呼んでいた。

7月7日 晴 昨日Mt.センリの登頂を終えたアタック隊を迎えた後、11時半に松本とともにA.d.cを出発する。日照時間の長いアラスカならではの行動である。

コルより急な雪面を登りきると先はナイフェッジの稜線となつて続いている。すぐに稜線上を歩けなくなるほど細くなつたのでスタカットで進む。まず松本が稜線にまたがつて進み小さなギャップへステップを蹴り込み下るが、トライデント側に雪庇が出ているためシットナ側へ回り込んで通過する。しかし次の登り口にクレバスがあり不安定な氷に苦労してまたぎ越す。これより稜自体がトライデント側に少し傾いているため、松本とかわつてシットナ側をスノーバーを1本打ちトラバースして行く。下には真青なランドクルフトが口を開けているのが見える。稜が真直ぐになつてきたので再び松本が稜線にまたがつて進む。両側に氷河を見下してのナイフェッジの雪稜の通過は壮快であるが、又高度感もかなりのものである。次のピッチで稜はナイフェッジではなくなつてきたがトライデント側に大きく雪庇が張り出しているためシットナ側によつて進む。これから尾根が広くなつたのでコンテニュアスにもどる。しかし雪面が大きく段になつて数ヶ所でずれており、クレバスが雪をかぶつてはつきりわからない。シットナ側の端がつながつていそうなのでそこを通過する。

いよいよ氷壁の下に出たが下から見えていたよりも急な部分が短かく、又青氷の出ている部分も小さい。松本が中央よりやや右側をアイスハーケンを1本打ち登る。2ピッチ目は氷の上に雪が乗つており、しだいに雪が多くなる。水分を多く含んだ重い雪である。しかしすぐにクレバスを踏み抜く。20cmほどの幅であつたがこんな雪壁にクレバスがあるとは思えなかつた。

傾斜がややおちたのでコンテニュアスで登り続ける。2時の交信で見えていた所の奥にまだ雪面が続いており、その間はコル状になつていてそこにクレバスらしき物があるので右(トライデント側)へ廻り込むように指示を受ける。やや右上へとルートをとり登り続けるが、その後も雪の下の氷にずれのある所が何ヶ所もあり気を使うが、副がせまいらしくなんとか通過できる。交信で知らせを受けた段になつたクレバス状の所につく。それを大きく右にまわりこみ登

る。思ったよりも登りが長く続き、まだか、まだかと思って登つているとしだいに傾斜がゆるくなると頂上に出た。午後2時5分であつた。



そこはかなりの広さがありその先は非常に細い稜線となり2つの高まりを持った後、ヘイズの南方とのコルへと続いている。広い頂上での展望を満喫し、写真を写した後3時15分に下り始まる。互に慎重に下ろうと声をかけあい強い日射ですつかり緩んでしまつた急な雪面を下る。どんどん高度を下げ、氷壁の部分をスタッフカットで下り終え、来た時のトレースをたどる。しかしこれからのナイフエッジの稜線の通過は氷化しかけの支持力のないザラメ状の雪ではトラバースの部分が非常に不安定になる。来た時と同じように稜線上に馬乗りになつたり、稜線上から降りて慎重にステップをたしかめながらトラバースし

たりして最後のピッチを終えると、テントから出て見守ってくれている皆の姿が見えた。5時にA.d.cに着き、翌日A.d.cを撤収しB.Cへと下る。

(3) エレファントピーク (10282 ft. Peak) 登頂記 松本繁文

7月5日、天候は朝のうちガスであつたが上空は晴れ、そこでA.C.に4日間の食糧、ガソリンの補給をし、その足でエレファントピークに登ることにしA.CをA.M.9:00に、N.A.M. 3名そろつて出発、例のトラバース地点で時間を食いトラバース完了がP.M.1:00、この1:00の交信でアタック隊2名が偵察を終えA.C.にもどつているということで全員そろつて登ることにし、(P.M.2:00 全員集結し、エレファントピークに向う。

集結地点より稜線までは、クレバスが1つ、それを越せばなんなく稜線である。稜線からは、スーシトナ氷河の全景がすばらしい。稜線上の少しクラストした雪面を快くとはしてすぐにエレファントピーク直下のコルに出る。天候も、ガスが晴れ気持よく晴れている。風もおだやか、直下コルよりは、スーシトナ側のルンゼ状のところよりピークに続く斜面に出る。このあとの斜面は気持よくピークに続き、ピークにはP.M.3:15に着いた。ピークからのながめは、稜線が美しく光っていた。

エレファントピーク直下のコルに途中デボした、食糧、ガソリン4日分をアタック隊2名に渡し再びA.C.と別れた。明日は、きっと良い天気だろう。

